弘教寺（ぐきょうじ）

つつじ寺だより

第５３号

発行所

〒370-0131
伊勢崎市境米岡二七九ー二
浄土真宗本願寺派弘教寺
寺報編集部
電話 〇二七〇（七四）〇五七三

寺のQR

仏婦創立五十周年を迎えて

弘教寺住職　中山英昭

先代住職のおり、昭和47年6月に弘教寺仏教婦人会は結成されました。

五十年前は戦後復興や高度経済成長の流れの中で、物を豊かにしてゆくことが優先され、仏法を聞く余裕もない時代となっておりました。本山でも各寺院に対して教化組織を結成するよう要請が出されておりました。そんな中弘教寺でも婦人会を結成することになりました。

前住職（父）で十年、私の代で四十年休まず毎月の例会を持たせて頂きました。前住職が往生した月とコロナ禍でやむなく二回程休会しましたが、毎月の例会を続けてこられたことは婦人会の皆さんの誇りです。

今も忘れませんが、前住職が往生した翌月の例会で40人程の会員の「正信偈」のお勤めの声の力強さ、30歳の若輩者の私を励まし、婦人会の活動を続けて欲しいという皆さんの願いが込められておりました。私にとっても十年続けてきた婦人会活動をやめるわけにはいかないと強く思いました。私自身が婦人会活動をお手伝いしていく原点です。

現在泉昌子さんが五代目の会長をつとめて下さっておりますが、歴代の会長さん、各役員の皆さんのご尽力によって、ここまで続けて来られました。一つ一つは字数が限られておりますので書ききれませんが、講師の先生方、会員の皆さん、関わって来られた多くの皆さんに感謝申し上げます。

婦人会の活動の中で、大きな流れとなったことを二つほど書かせていただきます。

二代目の岩瀬モトさんは念仏を喜ばれた会長さんでした。いつも挨拶は「皆さんどうぞご聴聞して下さい」で締めくくっておりました。そう言われるだけあって、ご聴聞を大事にされた方でした。県内の各寺院の報恩講法要にも聴聞を楽しみに参拝されました。遠方の寺院には私がお乗せして参拝されたこともありました。

今は宮崎市にいらっしゃる青井晨子さんの出会いが深かったと思います。弘教寺には5年半程の在籍でしたが、二人を中心にして大宮市（現さいたま市）の誓顕寺（岩田光哲住職）様の「歎異抄ゼミナール」への参加、築地本願寺の報恩講法要などへの参拝と、お仲間を誘い、10人前後いつも参拝される聞法仲間が生まれました。青井さんは宮崎に帰られてからも、宮崎教区仏婦会長として、本山仏婦連盟の評議員としても活躍された方です。岩瀬さんの最期はお念仏を称え、経文を称えてのご往生であったと聞いております。

四代目の野水孝子さんの時代、介護施設へのボランティア活動でフラダンスを披露することになり、経験のない会員の皆さんが野水さんの指導のもと特訓して数回の練習で本番となりました。無事フラダンスを披露でき、達成感の余韻もあり、フラダンスグループ「ユカレリ」の誕生となりました。

さらにそのことが発端となり、次々とサークルが生まれ始め、コーラスグループ、手芸グループなどが活動を始めました。壮年会も俺たちも何かやろうとなって、ゴルフ会、パソコン教室、マージャン会、囲碁の会、カラオケ会等が生まれました。一番盛んな時期に大小の弘教寺のサークルや例会を数えましたら、年間約２００回の活動をしておりました。

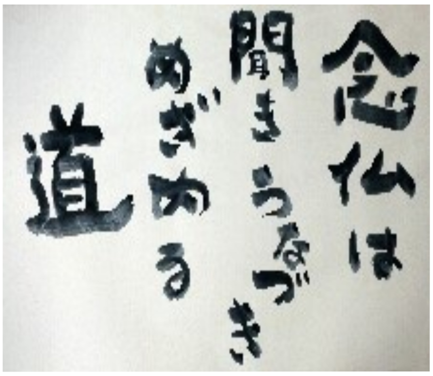
各サークルが自主的にやって頂いておりますので、私どもは、日時・場所の確保と調整だけで済みますから、可能なのです。

婦人会活動も夢中でお手伝いをさせて頂いているうちに、五十年の歩みとなりました。高齢化、会員の減少と今後の課題はありますが、続けていくことの大切さを強く感じております。歴代の会長さん、役員さん、会員の皆さんにお祝い申し上げ、感謝申し上げます。

仏教婦人会創立五十周年・仏教壮年会創立二十五周年念式典

好天の10月29日に記念式典が開催されました。式典は、記念講演をいただく武蔵野大学名誉教授で法善寺前住職の山崎龍明先生、ご来賓の群馬組西蓮寺住職の艸香雄道先生、群馬組仏婦連盟会長の鈴木由美子様のご臨席のもと、婦人会員による献灯・献花・献香、代表焼香で始まりました。参加者全員で「讃仏偈」をお勤めした後、泉昌子仏婦会長と根岸定明仏壮会長から式辞がありました。仏教婦人会総連盟総裁の大谷流豆美（るずみ）お裏方様より賜った結成五十周年のお祝いの言葉を鈴木由美子様が代読され、泉会長が代表でありがたくいただきました。続いて、ご来賓の艸香先生と鈴木様から、ご祝辞をいただきました。　屋外で参加者全員の記念撮影をして、山崎先生の「真の宗教・仮の宗教・偽の宗教」の講演をいただいた後、全員で「恩徳讃」を斉唱して無事に式典は終了しました。

橋本勝



「ご聴聞」を大切に

昭和47年、仏教婦人会は前ご住職のおりに発会し、初代会長は宮崎せい様でした。以後岩瀬モト様、福永君代様、野水孝子様と続き五代目の泉まで現住職様に支えられて年月を重ねてきました。お陰様で今日、五十周年を迎えることができました。本山からは、仏婦総連盟総裁大谷流豆美お裏方様より五十周年を祝して「お祝いの言葉」を賜り、この上ない歓びです。

振り返ると、毎月の例会は何よりも『ご聴聞』を大切にして、ご住職を始め組内のご住職方や遠方の先生方からも沢山のご法話を聴聞させていただきました。また、年一回の手芸の月やご住職の正月用生け花講座や行事に合わせて、ぜんざい、カレーを食べるお楽しみ月もありました。

野水会長時代に始まったフラダンスの会はコーラス等のサークル発会を促し、施設慰問にも活躍してきました。コロナ禍では活動を控えながらもシトラスリボンプロジェクトに賛同し、手作りリボンを施設や図書館等へ届け、感謝と思いやりの輪を広げています。

これからも阿弥陀さまのお慈悲をいただくご縁に感謝し、社会にも目を向けつつ皆様と共にご聴聞を大切にお念仏の日々を送りたいと思います。

合掌　泉昌子

仏婦五十周年に寄せて

尼入道のたぐひのたふとやありがたやと申され候ふをききては、人が信をとる

蓮如上人御一代記聞書

三十年程前、私が富岡の蓮照寺に入寺する決心を致しましたのは、正に「尼入道のたぐひのたふとやありがたやの声・・・」念仏者澤田ミネさんとの出あいによってでした。

その後、弘教寺様の婦人会の例会に初めてお招き頂きました日のことを今でも良く覚えております。澤田ミネという名前ではないのは勿論ですが、こちらにも尼入道の尊や有り難やの声が響いておられる。「満優さんの話を聴いて元気が出ました」と言われますと、とんでもない。こちらが勇気と元気を頂き、布教使の覚悟と使命をかみしめさせて頂いておりますと思わずにはいられません。

仏教婦人会五十周年、誠におめでとうございます。その偉業に敬意と、お育て頂いた感謝の念に絶えません。これからも百年二百年と尼入道の有り難き姿が続きますように・・・

蓮照寺住職　松岡満優

記念式典写真

「車の両輪のごとくに」

10月29日秋晴れの中、婦人会創立五十周年に併せて、仏教壮年会二十五周年記念式典が開催されました。壮年会は婦人会があるのに私たちが定期的に集まる場所がないとの声にご住職が答えてくださり、平成９年９月に結成されました。以来、会員の皆様の仏壮活動への思いと、歴代会長をはじめ役員の皆さんのご尽力とともに歩んで参りました。

今回まで年六回の例会を持ち、西蓮寺ご住職の艸香雄道先生には毎回「歎異抄」「正信偈」のご講話をいただき、お念仏のみ教えを分かりやすく学ばせて頂いております。

ご住職が仏壮・仏婦は「車の両輪のごとくに」と言われましたように、より活発な活動に発展するようになりました。

仏壮・仏婦の合同研修旅行、合同報恩講、各種サークルと相乗効果により盛んな活動となりました。また、現在コロナ禍のためにできませんが、例会後の会食が毎会楽しみでした。ご住職、坊守様のご配慮に感謝しております。これからも壮年会活動を通してみ教えの学びを深め、さらに友の輪を広げてゆきたいと思います。

根岸定明

「ここが私の寺です」

例会でお話をするとき、常々感じていることがあります。例会がはじまる際に皆さまが称える念仏の力強さ、また壮年会の歌を大きな声で歌われている皆さまのお姿です。

会員一人ひとりが弘教寺を「私の寺」として捉え、誇りをもっておられることが伝わってくる瞬間です。

「〇〇家と寺」（檀家）ということだけでなく、「私と弘教寺」という個人と寺が強い絆で繋がれ、お寺が心の支えとなる関係ができているということでしょう。そのことが、壮年会二十五年の歩み、そのものであろうと存じます。

宗教のあり方が非常に厳しく問われている現代ですが、今後も末永く活動を続けて行かれ、「ここが私の寺です」と紹介できる、御同行、御同朋の輪を広げていっていただきたく存じます。

私自身も、さらに学びを深め、お力になれればと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

合掌

西蓮寺住職　艸香雄道

真悟の京都日記（17）

10月28日、私が通う中央仏教学院は、本山本願寺の御影堂において開校百年、通信教育開設五十年を記念した法要を執り行いました。この法要では、学院生の中から5人だけ内陣に出勤することができ、私は大変名誉なことにその5人のうちの一人として選ばれて出勤してまいりました。

本山の内陣というのは一般の方の入堂は完全に不可で、僧侶であっても基本的には一定以上の学びを積んで資格を持った者しか入ることはできません。もちろん私自身その資格はありませんが、数少ない特例で、この大切な記念法要での出勤を任される栄誉をいただきました。

本山の御影堂は、とにかく大きいの一言に尽きます。本堂の裏側の僧侶が待機する場所は通常奥行一畳程度ですが、本山は奥行が四畳ほど、横幅に至っては50メートル走でもできそうなほどの広さでした。また、一緒に出勤した、本山職員の式務と呼ばれる方々の作法にも衝撃を受けました。全ての作法がすばやく丁寧で且つ正確で、私たち学院生はだれもそのスピードについていけないほどでした。

今回の出勤は、他の誰も経験できない貴重なものでした。今回感じられたことを心に留めて、今後の私の僧侶としての人生の糧としたいと思うところです。

郷土のこぼれ話❷　佐波新田用水路のサイホン

旧国道３５４の館橋から早川を遡ると東武線の鉄橋の下の細い橋のたもとに新田用水が流れ込んでいます。ところが稲作の季節になると、その流れ込みは減り、世良田側の水路に大量の水が勢いよく溢れて流れ出します。この仕組みが、１９６４年早川改修で設置されたサイホンです。水は早川の下を潜り大気の圧力によって反対側に噴出し世良田地区の田んぼを潤すのです。

境地域は昔から干害と用水問題のため掘割や池沼が造られてきました。境町駅前を流れる新田用水は、慶長13年（１６０８年）に初めて掘られた人口の用水掘です。もとは茂呂から広瀬川を取り入れ、武士、境を通って世良田まで引かれました。境町では、町の裏側を流れるところから「うらっ川」と呼び、東照宮、長楽寺がある世良田では、幕府の特別な庇護のもと「御宮御神領用水」と称して、他の村に優先して取水し、一番利便を受けました。

用水は、「千貫樋（せんかんひ）」という掛渡井が掛けられ早川を越えました。その後何度も架け替えられました。その時代の知恵を駆使した用水利用に人々の苦労が偲ばれます。

境まちの史跡・景観写真集より

水耕の季節のサイホンを是非ご覧下さい。

坊守

編　集　後　記

コロナ禍の中でゴルフは、感染リスクの低い屋外スポーツとして競技人口が増加している。特に若年層の増加が著しい。

10月開催の日本オープンでは、アマチュアの大学生、蝉川泰果選手が難コースを制して四日間トップの座を守り抜き、95年ぶりのアマチュア優勝を飾り大会を盛り上げた。

そんな中、10月下旬に開催された第34回弘教寺ゴルフコンペでは、佐々木康平氏が見事二度目の優勝を飾った。コースの下見を綿密にし、栄えある成果に繋げた。

橋本豊

◆ 行事予定 ◆　令和4年 12月～　令和5年 3月

月別	弘教寺の行事予定		教区・群馬組の行事予定	
12月	４日	報恩講法要		
	11日	壮年会例会		
	15日	弘教寺ｺﾞﾙﾌコンペ		
	17日	もちつき会		
	21日	婦人会例会		
1月	１日	元旦会	９日～16日	ご正忌報恩講法要
	20日	婦人会例会		
	29日	役員新年会		
2月				
	12日	壮年会例会		
	20日	婦人会例会		
3月				
			18日～24日	春お彼岸
	29日	婦人会例会		